

地域学術振興賞を受賞して
—南九州地域における地域材利用技術の開発と木材産業への貢献—

宮崎県木材利用技術センター
所長 小田久人

このたび、栄えある日本木材学会地域学術振興賞を受賞したことは本当に光栄なことであり、審査委員の先生方、推薦して頂いた九州支部の先生方に厚くお礼申し上げます。

略歴にあるように、私が宮崎大学大学院を中退して宮崎県庁に入庁したのが1980年でした。折しも、木材価格が最高値を付けた年でもあり、林業普及指導事業に携わるようになって、森林所有者の皆さんに「林業の将来は希望がもてる」と説明したのを覚えています。その後、1988年に研究職として林業試験場へ異動となり木材関係の試験研究に一貫して取り組むこととなります。当時は、構造材を乾燥して使うことがようやく認識され始めた頃で、林業の現場で取り組める「葉枯らし乾燥」が最初の研究課題でした。3年後に「針葉樹の構造用製材の日本農林規格」が制定され、初めて含水率区分と機械等級区分が導入されました。これを機に人工乾燥の必要性が駆られはじめ、除湿式乾燥機やくん煙乾燥機などが話題となったものの普及には至りませんでした。スギ構造材の人工乾燥技術が進んだのは高温加熱式蒸気乾燥機の登場からです。日本のスギ林業・林産業を代表する商品である心持ち柱材を表面割れ少なく低含水率まで乾燥できる「高温乾燥」技術は画期的と言って良いでしょう。林業試験場から林業総合センターへ移転しましたが、研究職で変わらずにスギ在来品種の材質、乾燥と強度などに取り組みました。

その後私は、移転や組織の改編に伴い現在の木材利用技術センター設立と同時に異動し、木材乾燥に取り組むこととなります。宮崎県では、人工乾燥装置を補助事業で大量に導入しようとしており、乾燥スケジュールの考え方や乾燥前の製材の取扱い方など、製材工場に対する乾燥の事務指導が強く要請されていました。センターに設置された乾燥機を使い、乾燥条件を様々に設定して実験を繰り返し、成果を乾燥講習会で工場の実務者に伝える活動を行いました。

公設試験場の研究員として幸運であったのは、研究課題に直接関わっていなくても関連のある実験ができた余裕が職場にまだあったことと、製材工場に出向き生産現場に携わる技術者に話を聞くことができたことの二つでしょう。いずれも自分の視野を広げてくれました。

林野庁では、林業現場の大きな問題である森林所有界の明確化に取り組む事業を要求されています。これまで以上に地域によって林業の生産力、すなわち素材の生産量に差が生じる可能性があります。日本全体の林産業の競争力向上と共に地域の力をもっと向上させる必要があると思います。そこにこそ公設試験場の生きる道があるのではないのでしょうか。

ここに至るまで多くの方との出会いがあり私を勇気づけてくれました。いくら感謝しても足りないぐらいです。本当にありがとうございました。